一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10－10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42－0211
定価　1部　150円
㈱橋本清文堂

創立90周年記念式典盛大に挙行される

我々の育った母校の創立90周年記念式典が新講堂の完成をまって一年おくれの昭和五十九年十月十五日に行われた。

当日は県内外からの同窓生をはじめ在校生、教職員、来賓ら千五百名が出席して行われた。

記念式典では鍋岡利明校長、一泉同窓会の宮太郎会長が「伝統を受け継ぐ自覚を新たにして、泉丘高校を大きく発展させていきたい」「現状に満足することなく、創造力を生かして母校の前進に努めたい」とそれぞれあいさつ。来賓の杉山副知事、岡本県教育委員長、県高校長協会の山上俊夫副会長（一中49期生）、関東一泉会の浦茂会長（一中34期生）が祝辞を述べたあと、在校生代表の生徒会長千保隆君が「一中、泉丘スピリットで頑張りたい」と誓った。

その後、記念講演として坂本三十次労働大臣（一中47期生）、奥田敬和郵政大臣（一中52期生）が講演した。演題は共に「最近の労働行政」「高度情報化社会と日本の役割」と堅い論題だったものの、最後は「青春時代の一番の思い出は、夢に見た一中に合格したこと、よく学び且つ遊びました」と若き日の思い出を懐かしんだ内容であった。

尚式典にさき立って本校出身の物故者の慰霊祭を厳霜碑前に於て執り行い、引き続き旧金沢一中初代校長富田輝象先生の胸像除幕式を行った。除幕にあたっては、遠く京都在住の先生の孫富田秀雄氏夫妻が参列され、曽孫の富田滋さんが幕を引いた。

また本年九月二十一日に発会したばかりの野々市一泉同窓会支部に依る記念植樹、桜の苗木二十五本が来賓、両大臣、山下貞雄会長等の手によりそれぞれ植樹された。

夜は一泉同窓会主催による記念祝賀会が約三五〇名の同会員が集り、酒を酌み交しながらの談笑が続いた。

「一泉」第十号によせて

泉丘校蔵書解題目録の編集を終えて（7）

木村栄博士レリーフ（relief）

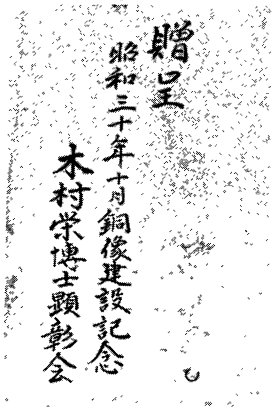
山森青硯（一中三十三回卒）

泉丘高校図書館書庫にかの有名な天文学者木村栄博士の肖像レリーフ（relief）が在る。誰が何時何処から贈られたか、全く不明である。添書が在ったに違いない。

今筆者が考えるに、バスが寺町より右折して（光が丘行）、泉丘校前停留所に達する大きい路、そのものが同博士生誕と成長された生々しい土地の点綴である。それ故同博士顕彰会が本校に贈られたものであろう。

筆者が此のレリーフを見て非常な感に打たれた。再拝して机上安置した。そして本校生徒が悉皆、木村栄博士の如く成長する様に祈った。筆者前職地（兼六園全史編纂室＝元九師団長官舎）が、木村栄博士銅像の室であり、今又博士レリーフが己が机上に安置されているではないか。よくよくの御縁が有ったと思ったからである。

木村栄博士のレリーフ



同　裏書墨書

最近筆者が入手した「木村栄博士（昭和30・10・5刊）」と云う小冊子を繙とくと、先づ巻頭に

今度本会が、木村博士の銅像をたて、そのレリーフを頒布し、さらにこの冊子を皆さんにお贈りするのは、郷土の大先輩としての博士のひととなり学問、研究、仕事にたちむかうときのひたむきな情熱、しんけんなたい度、根づよい努力に感げきし、そして人類のある限り、地球の上から消えることのない偉大なあしあとを、一人でも多くの方々が、忠実にたどって下さるようにと念願するからであります。

とあった。これにより昭和30年頃の頒布を受けた博士レリーフであることがわかった。博士は泉丘校と最も近い処、石川県石川郡野村字泉野新八四番地に、明治三年（一八七〇）九月十日に呵々の声をあげられた。（篠木庄太郎の二男として）翌年木村民衛と云う学者の家に養子となられた。そして御成長と共に、左記元一中の先生に和算、漢学、洋学、天文学を学び、修得された。

今川覚神（明26・7―明26・8）
大嶋　凞（明26・7―明45・3・5）
上山小三郎（明26・7―明45・3・18）

終始養父民衛氏の塾、木村塾に於いて漢文、習字に専念されたことは云うまでもないが、此の木村塾跡が、寺町三丁目電停より泉丘校通学路より六斗林、四十万谷与之先生宅への曲り附近の田圃がそれであった。

吾人は本校最近所に木村栄邸が在り、中田邦造（日本一の図書館人）邸の在った事を想起せなければならぬ。

博士Z項御発見の模様を前記冊子に依って記してみよう。

Z項の研究が、世界の学会に発表されたのは、明治三十五年の一月六日、博士が三十三歳の春のことでした。今迄アルブレヒトは、各観測所の観測結果から北極の移動を算出するのにXとYの二つの未知数を使って方程式を作りましたが、博士はその不充分なことを発見して、もう一項Zと言う未知数を加えられたのであります。つまり博士のZ項発見によって、緯度変化の原因は、今まで考えられていた外に、別なものがあると言うことがわかったのであります。

明治三十六年の万国測地学協会の総会には中央局からZ項に就いて報告し、改めて博士の功績にたいして感謝の言を述べました。明治三十八年には今迄二ヶ年間の各地の観測の結果を、博士のZ項を加えて計算し直したところ、水沢百三十点、チュルジュイ六十五点、カルロフオルテ七十九点、ガイザスバーグ九十点、シンシナチ八十二点、ユカイヤ百四点で、水沢が

だんぜんさい高点となり、完全に木村博士の観測が、いや、日本の天文学が世界から仰がれる様になったのであります。

ほんとうにこの時の博士のお心もちはどんなであったでしょう。外国ではこの時からZ項のことを発見者の博士の名を付けて「木村項」と言い出しました。

Z項の発見は緯度変化の観測の方法を大きく変へただけでなく、天文学全体について、根本から考え直させる事になりました。

とある。今でもテレビ解説にはZ気流の言が屢々出る。其震源地が木村博士にあることを忘れてはならない。どうしたことか、一泉同窓会の庭内から、今一つの天文科学者が出ている。筆者が前号で述べた拙稿中、大河千弘氏（昭和20年一中卒）がそれである。

今世界が叫んでいる核融合の世界的権威者である。（六斗林出身）鳴呼一泉科学者が世界に雄飛する日も、そう遠くはあるまい。

爆音（我が太平洋戦記）

片岡　茂太郎

（一中四十六回卒）

夕暮れの空の一点からかすかにあの音が聞えはじめてきた。プロペラ機の爆音である。聞き馴れている筈なのに、一人庭に佇んでいる時などあの音が近付いてくると、私はタイムトンネルを通って四十年前、戦場となった南太平洋へと引きもどされてしまうようだ。若い日に生命を賭けて出会ったさまざまの場面が思い出されてくる。それは少し心のうずきを伴うなつかしさでもある。

昭和十八年十二月三日私は南太平洋をボートで漂流していた。漂流してから一週間目である。くる日もくる日も白昼夢を見ているようなあの重苦しい風景の中に、かすかに青空の彼方から聞えてきた爆音。人間っておかしなものだ。敵味方何れの飛行機であるか分らないのに、いやアメリカ軍機である公算が極めて大きいのに瞬時ではあるが不安よりも喜びの方が先行するのだから、救助されるあてもなく絶望的と思われた情況に変化がおきたということに対する人間の素直な反応なのであろうか。

ここで話を十九日前にさかのぼることにします。昭和十八年十一月十五日、陸軍軍医学校幹候隊でたての我々見習士官五十四人は、ラバウルの傷病兵収容のため神戸を出帆する病院船ぶえのすあいれす丸（排水量一万屯、煙突と中甲板に赤十字の赤いマーク、白い船体、船腹に緑の横線あり）と、ラバウル第十方面軍に配属される四十三名（中谷亮一兄もこの中にいる。）であった。祖国を後に速力十二ノットで一直線に進む。

十日目の夜、空に数条の探照燈の飛び交うラバウルの沖あいに着いた。戦場へきたとの感を深くする。船は夜通し、あたりをぐるぐる廻って翌二十六日朝漸く港に入った。当時既に制空権はアメリカ側にあり、停泊中にも空襲警報がかかった。港内にいた数隻の艦船は全速で港外へと退避をはじめ、潜水艦はもぐってゆく。二つの飛行場からはすさまじい爆音と共に我軍機が次々と急発進する。その数七、八十機もいたろうか、零戦である。やがて雲の上からダダー、ダダーと、にぶい機銃の発射音がひびいてきた、空中戦がはじまったのだ。その日は幸にも港が爆撃されることもなく、千三百余名の傷病者、衛生隊員が収容され、午後五時帰国の手筈となった。

中谷兄等のラバウル組は下船したが我々十一名は任地のウエワク（パプアニューギニアのほぼ中央の太平洋岸にある）に行かなければならない。一行の指揮者である私は一人下船し、港の連絡所へと向った。爆撃の合間を縫っての乗船業務に追われ周囲はまことにあわただしい。ウエワクへ行くにはどうしたらよいかと尋ねるがそんな便はないという。これには参った。（後日知ったことだが事実時たま飛来する四航軍輸送機によるしか方法がなかったのである。）

ニューブリテン島、ラバウル。はじめて見る戦場、軍医学校での席次の関係上、一行の指揮者ということになったものの、才覚もない見習士官が一人でない知恵をしぼってもよい思案の浮ぶはずもない。連絡所の将校がこの船は帰えりにカロリン諸島、パラオに寄港するから、そこでニューギニアへの便を探してみたらという言葉に、再びぶえのすあいれす丸に乗船することと相成った。

内地へ帰えれる傷病兵のやせた土色の顔には喜びの表情が現われていた。さらばラバウルよと歌われている港を後にして翌十一月二十七日午前七時半頃、窓から外を眺めながら小用を足していると、突然ズシーンという振動と共に船足がはたと止ってしまった。（米軍哨戒機B24の投じた一発の爆弾が船倉附近の航外附近で轟然炸裂したのである。）思わず「やられた」と一瞬、現実の出来事

でなければよいという思いが閃光のように身体の中を突き抜けていった。然し事態は飽くまで現実なのである。ここは着ち着かねばならぬと、船倉に駆け降りてゆく。各自の所持品のはいっている将校行李は船倉に置いてあった。シャツを着込み、水筒に水を入れ、軍装を整え、急いで中甲板へと昇っていった。もうデッキは傷病兵で一杯である。既に海面には五、六隻のボートが浮び、どれもこれも人であふれている。傷病兵の大部分はあの悲惨なガダルカナル戦の生残りであるため死に対する恐怖をあらわにしていた。我先にと縄ばしごを伝いボートへと飛び移ってゆく。船は既に船尾の方へ少しづつ傾斜しつつあった。私も終りのほうのボートへ乗ることができた。

この病院船にはラバウル兵站病院にいた五十名の従軍看護婦も内地送還のため乗船していた。後で聞いたのであるが、彼女等は患者の移乗を先にし自分達は膝ぎりのところまで海水がきてから飛び込んだということである。だから後でボートに引き上げた時、みんな目と歯を除いて上から下まで重油で真黒けであった。中には重油のまじった海水を飲み込んで苦しげに嘔吐している者もいる。長年培われた赤十字のシンボル、奉仕と責任感とが沈没寸前十数分間の彼女等の働きに現われたのであろう。一万屯の白い巨体は被弾四十数分後にその船首を真っすぐに上空に向け、ごぼごぼと南海の底へと消えていった。

ぶえのすあいれす丸は単独航行の上、爆撃された際無線機が故障したため、どこにも連絡することが出来なかった。だからラバウル基地でもその沈没を全く知ることができなかったのである。

私達はこの事実を知った。救助されるあてが全くないということを。船長が元気な船員三十名を選び、ボートでどこか近くの島にでも連絡できないものかと漕ぎ出していった。果してうまくゆくであろうか。

その夜は十五、六隻のボートがなるべく離れないようにと一ヶ所に集った。見上げると降るような満天の星、壮観としか言いようがない。南十字星がその美しい姿態を横たえている。海面には静かな波のまにまに無数の夜光虫がきらきらと白い光を放っていた。雄大な自然の前に人間の無力さをこの時ほど思い知ったことはない。

明けて二日目、ボートには定員八十名のところに百名以上乗っているのだから、それこそ身体を横にすることも出来ない。赤道直下近く灼熱の太陽が容赦なく照りつけている。なによりも水が欲しい。ボートには備えつけの水の入った樽と、乾パンの箱とかがあったが、百名、一ヶ月間食いのばすとして朝夕二回、将校水筒のキャップ一杯の水と、クラッカー大の乾パン一個の配給ということになった。水筒は私を含めて三人しか持っていなかったが勿論共有のため差し出した。

三日、四日と長い長い日がたってゆく。南海の藍色の海面は飽くまで穏かである。潮流のためであろうボートはいつの間にか離れ離れになっている。相変らず口渇が激しい。水道の蛇口に口をつけて腹一杯飲みたいと切に思う。中にはボートの縁につかまって頭から海水を浴びているものもいる。私達のボートに三名の看護婦が乗っていたが、船尾へいって用を足している姿を見てもなんの感情もわかない。性欲とは平和であって、食足りての上のことであろう。

五日、六日と空虚な日がつづく。衰弱しきった病人は何人か静かに死んでいった。中には発狂して救命胴衣を尻に波の上を歌を歌いながら流されてゆくものもいる。呼んでも全く反応がない。そんな中にあったが、私には何故か死というものが現実のものとして迫ってこなかった。あたりにはけだるい空気が漂っていた。

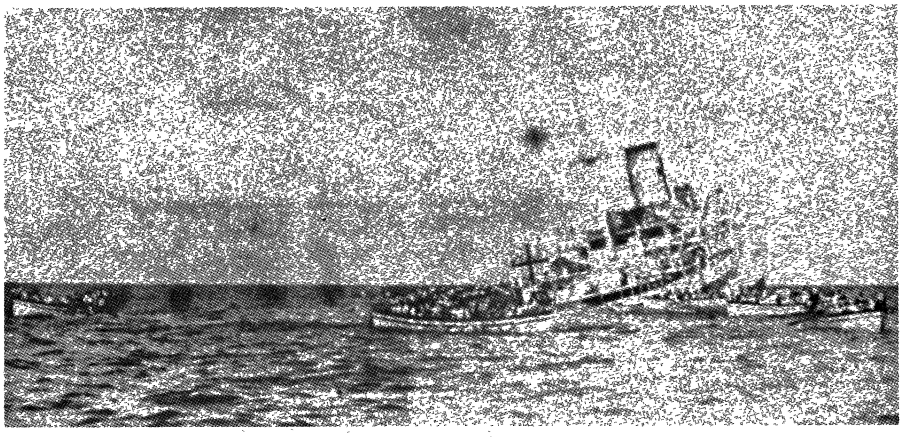
そして一週間目の午後、ボートも遠くに三隻見えるだけ、あとはどこへ行ってしまったのだろう。と青空の彼方からあの爆音が聞えてきたのである。もしや友軍機であってくれたらとの願いも空しくそれは我々を撃沈したと同じB24爆撃機であった。やがて段々と降下しはじめ超低空で彼方の三隻に、前後六挺の13ミリ機銃で銃撃しはじめた。次は我々のボートである。みんな海に飛び込んだ。ボートと私の間をすごい音をたてて機銃弾が飛び散ってゆく、この時ばかりはこれで終りかと思ったが幸にも当たらなかった。B24は旋回し向うの三隻に又もや掃射の態勢に入ろうとした時、突如として、それこそ一天にわかにかき曇り、スコールがきたのである。たたきつけるような雨、雨、雨、急いでボートに乗り、底に敷いてあった油によごれたシートをボート一杯に広げ水を受けたものである。

どれだけ飲んだであろうか。二升か、三升か、それこそ心ゆくまで腹に注ぎ込んだ。みんなの顔にも生気が戻っていた。後はどうなることかすべてあなた任せであるが、今はスコールを防がねばならない。シートをボートの上にすっぽり覆いかぶせ、びしょぬれの膚と膚とをくっつけ合っていつしか深い眠りに入ってしまった。今までのことも、又今後のこ

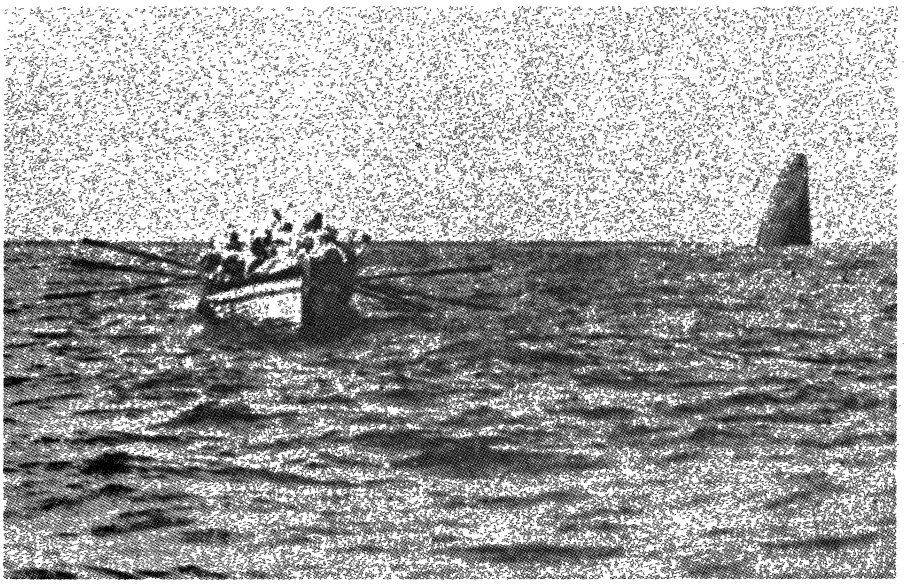
ともすべてうち忘れて……。

どの位時間がたったのだろう。ふと眼が覚めて現実に引きもどされた。隣りの戦友はまだ眠ったままである。そっと覆っているシートを持ちあげてすき間から外をのぞく。見なければよかった。真暗やみの中スコールはその勢いを少しも衰えさせず、小山のような、それこそ七、八米もあろうかという波のまにまに翻ろうされているのだ。横波をくらったら一巻の終りである。ええままよと覚悟をきめてシートをかぶり、眠ることにした。今にして思えばあれからよく眠れたものである。何よりも一週間ぶりにたらふく飲んだ水がすべての神経を和らげ、それがくそ度胸となったのかも知れない。

明けがたみんなのわいわい騒いでいる声に眼が覚めた時、あの物すごい夜の光景が嘘のように海はないで昇りはじめた太陽のもと、小さな島が前方にぽっかり見えているではないか。広い海面上に浮いているのは我々のボートだけである。恐らく無人島であろうが、ともかくあの島へ行こうということで、今までしまってあったオールを引きだし、交代で漕ぎだした。疲れてくると、海水を頭から浴びせながら励まし合って漕いだが、近くに見えて仲々距離がちぢまらない。五時間程漕いでやっと



病院船、B24に攻撃さる



昭和18年11月27日、病院船「ぶえのすあいれす丸」は被弾、沈没した。傷つき倒れた兵士とともに従軍赤十字看護婦は7日間漂流しその間も職務を全うしたが、米軍機はたびたびこれに銃撃を加えた。

珊瑚礁に着くことができた。膝上までの深さのところを歩きはじめた時、あるいは戦争の終るまでこの島でロビンソンクルーソーのように暮すことになるかもしれないと内心思ったものでした。と、島陰から一隻の黒い艦艇がすーと姿を現わしてきたのである。これには驚きもしたが、とっさに敵味方どちらであるか全くわからない。然しもうこうなったら生死の確率は五分と五分である。日章旗を振ろうということで、誰れかが持っていた旗を振った。幸にもそれは我々を救助に来てくれた味方の海上トラック（小型鋼船）だったのである。

先に漕ぎだしていった船長以下三〇名乗船のボートが事件後四日目に、たまたま敵潜水艦の雷撃で沈没した別の輸送船の救助に向っていた駆潜艇に発見され、そこではじめて、ぶえのすあいれす丸の遭難がわかった。

艇長は急ぎラバウル基地に連絡をとり、一旦カビエン基地（ニューアイルランド島）に引き返し、海上トラック二隻を率いて来てくれたのである。救いあげられて船上で食べたあの白い五分粥のおいしかったこと今も忘れることができない。その夜は大きな島（恐らくニューアイルランド島であったのだろう）の陰で一停泊、翌朝早く出発する。

やがてカビエン基地が見えてきた。海の色はいつしかエメラルドグリーンに変っていた。珊瑚礁に移るところ白いさざ波が砕け、椰子の葉がゆらいでいる。一幅の絵を見ているような美しさであった。桟橋に降りたったとき、地面に足をついた安心感と、一週間の疲労とが一遍にでてきて思わずへなへなと尻をついてしまったものである。

我々一行十一名も無事再会することができた。然し数人のものは、何も持たず裸の上に看護婦の白衣をまとったままの異様な格好なのだ。一体どこでどうなってしまったのだろう。まだニューギニアへの赴任途中なのである。

（ぶえのすあいれす丸遭難の後日調査の結果、たまたま附近航行中の味方駆潜艇、護衛艦に救助されたものを合わせ、航海当初総員一、四二二名中九割近い一、二六四名が救助されたことは全く不幸中の幸いであった。尚別掲の写真はアンリー、デュナン教育研究所出版の元従軍看護婦たちの手記「続・ほづ、のあとに」に掲載されていたもので誰れか分りませんがボートに移乗後写したものです。）

人生行脚

――同期生の会誌から――

大森玄衆（一中三五回卒）

人生五十年が七十年になり、やがて八十年にも届きそうになってきた。昭和三年三月の一中卒業生三五会の連中も齢七四歳から七七歳にもなった今日、各々の通ってきた人生はそれぞれ異なるが、この正月、誌上年賀の意味で現況・所信・感懐などを集めたところ、興味深い結果があらわれた。

卒業時の一七二名の中、半数の八七名が亡くなっており、八五名（中、消息不明が六名）が生存していることになるが、その殆ど、七一名の回答があったことは驚きであり、中には自身筆をとるのがままならぬと家族の代筆が三名もあるのは痛ましい。

回答の内容は悠々自適というか、趣味と健康保持のための散歩、ゴルフ、ゲートボール、庭木づくり、畠づくり、囲碁、俳句の毎日を楽しんでいるというのが一番多い。

次は病苦を訴えているもの――この中でも一病息災と達観している組と、はれものに触るように静養につとめている組とがあり、病名も脳卒中、白内障、坐骨神経痛、前立腺肥大、心臓病などとさまざま、又一人でいくつもの病気と闘っている者もある。

然し「三っ子の魂、百までも」で、誰の文章もその中に中学生時代の気風の片鱗がみえ、昔と変らず意気軒昂、世情を慨き、国家将来を慮る組もあるかと思えば、孫を相手に日向ボッコの好々爺をきめこんでいる者もある。

関東、関西の県外在住者はやはり金沢の町並、本多の森がいつも脳裡にあるようで望郷組ともいうべきか、同じもの思う組でも細君を失くした寡夫組の心情が切々とうら哀しい。そのほか数人もの通信に妻の介護に感謝し、妻をいたわる気持が随所に現われている点では「嘗ては〝ごぜんさま〟であった者どもが、今になって……」と皮肉る後輩も出て来そうだが、「今に見ていろ、お前達も……」と言い返したくなる。

それにしても元病院長をしていた一人の寄せた文の中に「食塩を少なく、禁煙、晩酌一合、ぬるい風呂、歩け歩け、ころぶな、カゼひくな」は名言。

昭和も六十年、三五会員の誰もがもう行きつくところまで行きついたように見える。が然しこれからが人生のほんとうの正念場、元気にあの世までの生命を燃しつづけよう。

美とは こんなにすばらしい

――日曜画家のたわごと――

大蔵吉夫
（一中四十七回卒）

英国のあの有名な、サー・ウインストン・チャーチルは、激務に余暇をみいだして素晴らしい油絵を後世に残している。展覧会などへ足を運ぶ人なら誰でも絵は描けるものである。私も約二十年前の誕生日の祝いに娘が絵具、キャンバス等を買ってきたのが病みつきになり、ゴルフもやめて日曜日は絵に没頭している。

絵には底が無い、どんなに描いてもこれでよいということはない。下手とか上手とかは、第三者が評価してくれる。描くことは楽しい。上手な絵をみると感激する。風景でも裸婦でも感動して描いた絵は素晴らしい。仕事を忘れて日曜日に絵を描いた月曜日の仕事は十倍能率がよくなることは私の経験から断言できる。今からでも遅くはない、絵筆を持ってみませんか。美とはこんなに素晴らしいことを、あなたは発見することでしょう。

（筆者は㈱北鉄航空取締役社長、「チャーチル会金沢」幹事長、「㈳亜細亜美術交友会」会員、「桜美会」常任理事）

Sir Winston Churchill by SARAH CHURCILL

『気晴らしに絵程いいものはない。
未だやったことがなければ、是非一度
試して御覧、私を嘲笑する前に。
そしてしくじったところで大した損害
でもなかろう。
絵を描き出せば上手も下手もない。
第一、頭の中に何事もなくなる。
やって御覧、是非一度、死なないうちに。』

サー・ウィンストン・チャーチル

金沢一中 五年間の思い出

斎藤弥吉
（一中四九回卒）

兄二人のあとを追い、憧れの金沢一中生となったのは昭和十二年四月一日であった。片田舎の学年一クラスの小学校から私一人が一中生となり、先ず驚いたのは、広くて勝手がわからないこと、壁は落ち、戸は破れ、石の踏段は磨滅し足で踏まれる所は凹んでしまっていたことでした。小学校では裸足で駈け廻っていた小学生が、汽車に乗り金沢へ出て金色の桜章の附いた制帽をかむり袖に緑色の紐を縫い付けた制服に、ゲートル巻きの編上靴を履いたまま校舎内を歩き廻ることが出来るので、なにか急に偉くなったような気がしました。しかし入学して数日後私が教室入口の観音開きのドアのノブにぶら下り、クラスメートに開け閉めさせているところを、英語の加藤辨三先生に見付かり、さあ大変、出席簿で頭を〝ピシャリ〟。

各部勧誘のビラに誘われて入部したのが、黒川先生の書道部でした。しかし永続きせず部員記念写真をとった後退部しましたが、今にして思えば残念でなりません。若し退部しなければ山川孝氏の如き大家になっていたかも知れません。

さて一年一学期はどの学科をとっても生れて初体験のものが多く、目まぐるしかったのに更に七月七日、日支事変がはじまったことです。あわただしく学期末試験もすみ、直ちに七月二十一日から五日間、本多町の木造旧校舎から新築成った新校舎（現泉丘高校舎の前身）への移転行事が行われました。当時は車も少く、全校生徒は学校の備品などを手に持って運んだものでした。そしてコンクリート三階建の新校舎は県下唯一の立派な講堂のあるすばらしいもので身の引きしまるのを覚えました。

無事新校舎移転がすんだら次は一年生恒例の金石海浜での水泳訓練でした。やっと八月に入って本当の夏季休暇です。私は子供の頃から乗ってみたいと思っていたボート造りに挑戦しました。材料を買い二人乗りの木製ボート長さは二米五〇、巾一米、平底です。私の生家は河北潟沿いの潟端という村落であり、家の前にもクリークがあり、村中河北潟迄クリークが通じていて、当時有名な水郷でありました。進水式は、叔父に手伝ってもらい河北潟迄出ました。

当時私にとっての通学方法といえば、午前五時半に起こされ、家から二十分歩いて津幡駅へ、そして六時三〇分の上り米原行に乗り六時五十分金沢駅へ、そして本多町へは往復とも徒歩でした。二学期からは泉野の新校舎へは、金沢駅から市内電車に乗り寺町三丁目で降り旧市立工業校前を過ぎ学校へ、天気の良いときは長町―野町広小路―地黄煎―学校の経路でしたが、電車に乗る場合に較べ十分位の時間差しかありませんでした。

学校に慣れてくるに従い、判ってきたことは何といっても一中は上級校への進学率が群を抜いてよいことでした。先ず一年で陸軍幼年学校進学者が出、毎年成績順に座席がきま

り、四、五年生は共通の進学のための模擬テストを受け、その成績は体育館に貼り出され、各自はその順位によっておのずと志望校を定めました。現今の偏差値と共通点があるような気がします。

しかしそれにもかかわらず、私は五年間卒業する迄柔道部に籍を置き下級生をイビッたものでした。何しろ四年の頃から寝技にかけては私が全校一の実力でした。しかし悲しいかな戦時下なるが為、試合に於て寝技に誘い込むのは卑怯とされて認めてもらえなかったのが残念でしたが段位だけは頂戴しました。

又金沢一中のみにあったものとして漕艇部の存在です。大野川に第四高等学校のすぐ隣にわが一中の艇庫がありました。毎年五月か六月頃全校行事のクラス対抗のボート競技が挙行されたものです。あれは昭和十三年、私が二年生のとき橋本精文氏を誘い大野川の葦原の中から野鳥の卵を持ち帰り、我が家の鶏どもに抱かせ見事鴨を養殖したことが思い出されます。

そのように戦時下とはいえ、私達にとっては少し恵まれた五年間であったと思われます。何故なら、縮刷版「いづみの原」に「桜章時報」全巻がのせられていますが、昭和十二年七月二十日に第一号が発刊されましたがそれは私が一年生のときでした。そして五年生の最後の号は昭和十七年二月五日の第十八号でした。そのしばらく前、私達が五年生であった昭和十六年十二月八日、運命の大東亜戦争のはじまり。「桜章時報」戦況の悪化とともに私達が卒業しばらくして休刊となりました。

昨年十月十五日創立九十周年を迎えましたが、その式典に華を添える如く、卒業生、在校生の作品が飾られてあり懐しく拝見致しました。私が桜美会の事務局長として、多年陰ながら努力しているのに飾られてある作品の中にナント小生の長兄（金大名誉教授現金城短大教授）斎藤晃吉の旧本多町校舎玄関と富田校長の胸像を描いたものがありました。ちなみに当時の作品は全校生徒のものを、宮沢外与治先生のはからいで保存されてあります。（枠からはみ出した同窓会副会長小川忠男氏の当時の用器画も厳重保管されてありました。）

私の青春前期ともいえる当時の金沢一中での五年間は年とともに益々懐しいものになって参りました。私の生ある限り心の中に金沢一中を抱きしめて参ります。

金沢一中万歳
泉丘高よ永遠なれ

よろこびもはた悲しみも われに運命（さだめ）の業（わざ）には非ず 日々たゆまぬはげみをこそは！

社会福祉法人　仏子園
理事長　雄谷助成
（泉一〇回卒）

この詩は高校時代から二十数年を過ぎた今でも私に影響を与え続けている作品です。今は智恵おくれの障害をもつ子らとの生活に明け暮れている毎日ですが、学園が創立されて二十五年目を迎え、それまで沢山の父母、御家族の方々との出会いがあったのですが、御父兄の顔や態度には、悲愴な雰囲気がただよい、どうしてうちの子だけがこんなことになってしまったのだとか、私達は何も悪いことをしていないのに、この様な塗炭の苦しみを味わわなければならないのか、と云った話題がよく交わされます。中にはこれは前世の因縁があるのだと言った話しにまで発展したりします。

たしかに中にはある日突然障害が発見されたり、いつまでたっても言葉が出てこなかったり、歩かなかったりして、悲しみのあまり病院や各種の相談機関をたいへんなねばりと熱意でもってかけずりまわってみるのですが、どうも特効薬みたいなものは無いことを知り、やはりこれは私達に与えられた運命なのだと考え始めるのは当然のことであると思われます。それからは運命との戦いや、世間の好奇の目との確執が始められる訳です。中には極端な例ですが、三十五年間も一歩も家の外に出さず、世の中にこんな色の白い肌をもった人がいるのかと思える様な女の子がいたことを、富山で行なわれた研修会で聞きましたし、家庭崩壊の例も数多く目の前で起っています。しかしながら数多くのお父さんやお母さんがたは、これを運命だとあきらめずに勇敢に立ち向っておられます。

世の中には背が高く生れた人もいますし、太った人や、やせた人や、走ることが早い人や遅い人もいます。

学校の成績も優れた人もいますが、学園の子供達の様に充分でない児も沢山います。でも素直な元気な人間です。努力をしないで野放図に生きている人より毎日毎日を一生懸命に生きている姿こそ、本当は社会に生活できる資格を持った者ではないでしょうか!!

こんなことなどを考えながらこの詩に出会ってからはや二十七年が過ぎたことに驚いている。益々「日々たゆまぬはげみをこそは」である。

同窓の集い

◇一中三二期生の全国大会

一中三二期生会は、十月十四日(日)夕、粟津温泉法師旅館で全国大会を開催した。母校創立九十周年記念式典の前夜祭であった。参加者は関東七、大阪一、富山一、石川十の計十九名であった。現存者六四名の対比三〇％の参加率は、必ずしも上乗とは言えないが、喜寿を超えて兎角憶劫になり勝ちな年齢としては、まあまあの出席数であろうか。

当日は午後三時頃より逐次集合、折柄熱戦中のプロ野球日本シリーズ第二戦のテレビに見入ってロビーを離れない者、或は直に部屋で着替えて名湯に浸り旅の疲れを癒す者など、思い思いに寛ろいだ。

五時四十分広間に集合、一中校旗をバックに記念撮影の後、直に総会に移った。

地元当番の吉田より、開会の辞に併せ諸般の報告があり、九十周年記念事業協賛金に付ては、三二名より計二七五、〇〇〇円の拠出があった事が申添えられた。

次に昨年中に他界された級友六名、体調を崩して欠席された諸君の報告に及ぶと、流石に一同しんみりとして、今更にお互の年齢を思い知らされた。

事務報告を終って、地元代表として太田真一君、県外代表として下村節義君の挨拶があって、横浜の相馬克巳君の音頭で乾杯して懇親会に入った。

一昨年五月、白浜温泉での全国大会以来、満二年半振りの会合とあって懐しさも一入で、久闊を叙して近況を報じ合い、和気藹々裡に盃を交わしたが、カラオケも入れず静かな語らいと、新鮮な郷土料理の賞味に終始したのは、これも亦年齢に相応しいマナーの宴であったと言えよう。

最後に金石の福田久太郎君のリードで校歌合唱、大阪の竹田喜久三君の万歳三唱で、九時前お開きとなった。

尚法師旅館の評判が頗るよく、明年も再びこの会場で開くこととし、翌日那谷寺の紅葉、九谷焼窯元を見る企画に意見の一致を見たのであった。

翌朝九時半揃って旅館のマイクロバスで、一路泉丘高校に向った。記念式典に参列したのは十五名で、殆んどが新校舎を見るのが初めなので、その豪華な偉容に驚き且つ感心した。お抹茶の接待を受け、お美味しい和菓子を戴いて、流石に金沢なりと感心した。受付、案内、接待と女生徒の淑やかさに接し、これが一中の後輩かと一瞬とまどった。

控室で小憩の後、校内を見学一巡した。全国公立高校の中でも屈指を誇るその施設は、真に至れり尽せりで、若かりし日の本多の森の校舎を偲び、ここで勉学する生徒達の幸福を羨んだ。

十二時半から厳霜碑前の慰霊祭、初代富田校長の胸像除幕式があって、大講堂での九十周年記念式典に臨んだ。最後の労相坂本三十次氏、郵政相奥田敬和氏の講演は、在校生徒は固より吾々卒業生に取っても、極めて感銘深いもので、両大臣を同窓に持つ誇りを一段と感じた。四時半閉式の後は三々五五、祝賀会場のニューグランドホテルに向った。パーティ方式のこの祝賀会に出席したのは、東京勢五名と地元二名の計七名に過ぎなかったが、一つテーブルを占拠して動かず、専らバンケットガールの運んでくれる料理を喰らい、ビールを呑み、水割り日本酒と盃を重ねて粘り、万歳三唱で解散の後は、更に片町まで歩を延ばし、百万石金沢の夜を堪能したのであった。出席者次記の通り。

浅香勇吉、泉谷弥一、大島勝比古、大嶋勇政、太田真一、可長乙吉、清水　弘、柴田　喬、下村節義、新谷桂三、相馬克巳、竹田喜久三、橘倫、富沢友治、福田久太郎、本部均、松井清忠、松林幸雄、吉田直茂

（吉田直茂記）

◇第12回三三会大会記

十月十四日、気づかわれた雨も霽れ上ってまずまずの天候。定刻午後二時前から旧本多町校庭の記念樹下には各地からの会員がボツボツ参集。久闊を叙して談笑。定刻を遅れること三〇分、不参加者三名（先行していた）を残したまま一同観光会館横のバスに乗車。

バスは市役所横から目下工事進行中の香林坊を通り、黄緑色に塗り換えられたばかりの犀川大橋を渡って一路南下。この橋は一中在校中の大水で流されて再建後既に六〇年を経過している。

有松では昨年貫通したばかりの新道を通り、加賀産業道路を経て鶴来の白山比咩神社に参拝後、手取ダム開発資料館を見学して白峰のホテル八鵬着。

一浴後六時から総会、井口君の開会挨拶に続いて藤田から経過報告並びに来年度の提案などあって祝宴に移る。

翌十五日、一点の雲もない快晴に、全員何となく浮き浮きした気分。朝食後の会合で来年度の会場を新潟県、弥彦温泉と決定する。

ホテル前で記念撮影の後、近くの白山麓民族資料館を見学して金沢国際ホテルで昼食。正午過ぎ一同打ち揃って母校の校門をくぐる。全員学校からの記念品をもらって後は流れ解散となり、校舎を参観する者、慰霊祭、除幕式に列席して次の行程に移る者、式典に出席して二大臣の記念講演を聴く者、更には夜の祝賀会にも参加する者等。いずれにしても二日間に渉って好天に恵まれ、六十年前には思いも及ばなかった手取流域の開発に驚嘆して、又の日を約して西に東に散解した。（藤田記）

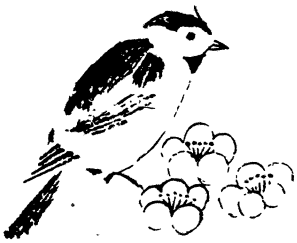
本年の出席者氏名は次の通り。

◎特別ゲスト　米林初子さん（石浦神社向角のえんどう餅屋の昔の娘さん、吾々と同年輩）

◎会員

（県外）水落久雄、村又吉、安田俊雄、村上外雄、武藤文雄、柳瀬芳意、同夫人、近藤師家司、小寺俊一、高田小市、同夫人、米林栄、小出武、宮村外雄、松本正雄

（県内）小林利喜松、北田勘良久、門野実、田中嘉太郎、俵　正、小西幸喜、辻義雄、岩城谷博、西村四郎市、岡田一男、川西弘晃、村上進、村尾泰、伊藤進、宇都宮亮一、井口政雄、同夫人、藤田誠一、同夫人



創立90周年記念大会のお礼

昨秋、十月十五日、母校創立90周年記念大会の開催が盛会裡に挙行されました。

新装なった講堂に於ける式典を始め、富田初代校長の胸像再建、物故会員の慰霊祭等には五百名を超える同窓、先輩が各地より参加され、洵に盛大な記念大会となりました。

これは偏えに同窓各位の絶大なるご協力の賜と厚くお礼を申し上げます。

この記念式典を機に歴史と伝統に輝く泉丘高校は愈々発展向上へと前進することと思います。

茲に旧金沢一中、泉丘高校の各期同窓会の皆様のご協力に対して深甚なる敬意と感謝の意を表します。

創立90周年記念大会
実行委員長　竹田長松

◇三五会（昭和三年卒）の総会

金沢駅からの近い場所、然もここ数年同一の場所、ホテルニュー金沢で五月十九日五九年度の総会を開く。

近年、駅の近くに会場を選んだのも、わけがある。関東、関西などからの遠来客が多くなってきたこと、「駅前」といえば金沢近辺の者も分りやすく、交通の便もよいこと等々。

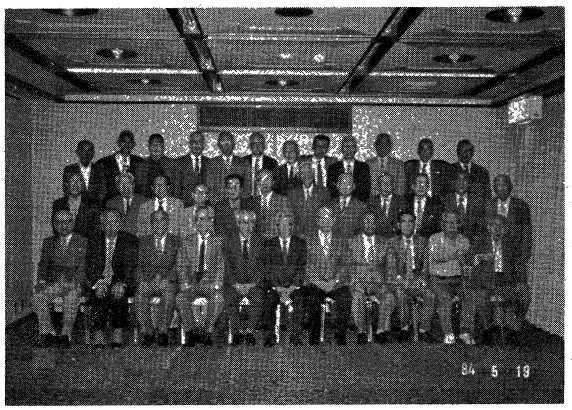
昔、同期の会の会場ともなれば金沢の中央部、しかも二次会にも便利なところが選ばれたものだが、今老年の会場は専ら酒食よりも懐旧談、近況の話合いに花が咲く。ことしは四時の開宴の前に二時より開会とし、喫茶室での談笑の時間を持つようにしたら大うけだった。

「おまんなァ誰やったけー」と卒業以来五六年ぶりに顔を見せた群馬県からの田中博君、横浜からの増村尚武君には皆驚くやら嬉しがるやら――「雲にそびゆる白山の……」を斉唱して八時近く散会した。

因みに一中三五会（昭和三年卒）は卒業時一七二名、現存者八五名、本日の総会出席者は左記の三六名だった。

板垣吉兵衛、松村博、金岩明、福田重一、篠原毅、大浦喜三郎、田中博、篠原一恭、牛塚藤雄、越田喜久治、南部貞一、増村尚武、福岡志良、居村喜久治、作本秀雄、橋奎次、広瀬清浩、五宝良吉、桜井進、結城与久、飯尾外具五郎、笠野外喜夫、浅地忠、野村忠、池谷一雄、桜井喜文、畑中善三、新広太郎、泉友雄、内田喨太、杉野啓、松井順孝、村尚雄、島村信介、市島亀太郎、大森玄衆

（幹事　大森記）



◇六桜会の集い（昭和六年卒）

母校の創立九十周年記念式典が催されるに併せて、各同期会も夫々の大会を開催するときいている。

吾が六桜会も亦、これに遅れじと大会を開くことに決定、東京、関西の諸兄に檄をとばして十月十五日、金沢市の魚半で催した。これに先立ち学校にて挙行される式典、慰霊祭、富田初代校長胸像除幕式にと、それぞれ参加、泉野原頭にそびえる堂々たる校舎の見学、かつて旧本多町の古びた校舎に学んだ当時を想い浮べ隔世の感を覚える。

総会は関東勢を加えて三十五名、白髪、禿頭、長髪とかつての童顔もかくやとばかり、毎回、繰り返す話題も尽くることなく和気一杯、いつも乍らの同窓会風景で時の過ぐるのも忘れる有様、久々振りの顔合せの会談も夜の九時を過ぎ散会した。

（加藤俊男記）

同窓、先輩よりの著書のご寄贈

前回に引き続き同窓、先輩の各位から貴重なその著書のご寄贈をいただきました。

これを基にして将来の「一泉文庫」として広く後輩に公開したいと夢をえがいております。

ご寄贈をいただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

◆奥田敬和氏（一中五二回）
　テレコム列島改造論

◆茶谷十六氏（泉一一回）
　南部三閉伊一揆と現代

◆安原一郎氏（一中三五回）
　三郎日記
　（ノモンハン上空で散った航空将校の軍歴の記録）

◆浦　茂氏（一中三四回）
　われらの郷土はなぜ空襲を免れたか

◆今川千栄子（通信一八回）
　能登島つれづれ

◆海軍機関学校同窓会
　海軍機関学校出身戦後殉国者遺芳録

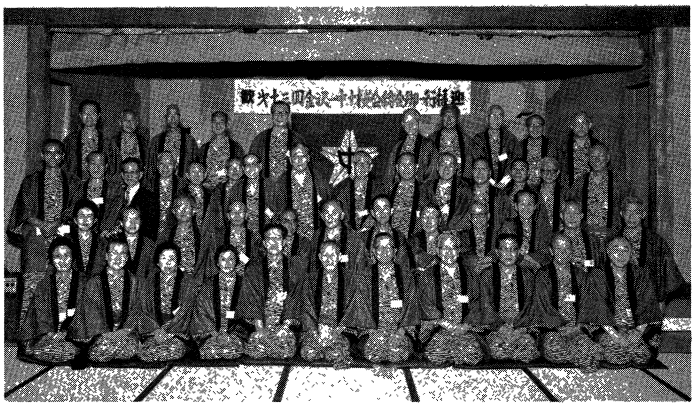
◇第13回金沢一中十桜会総会

（昭和十年卒）

於 湯涌温泉 白雲楼

去る十月十四日、十五日の両日、毎年恒例の十桜会総会を秋色たけなわの湯涌温泉白雲楼で開催した。

本年は母校の創立九十周年記念でもあり、恰も十五日に記念式典が催されることもあって、宮沢先生、塚野先生をはじめ、総員四十八名の出席をえて誠に盛会だった。



総会は先ず梶川会長の挨拶にはじまり、金沢幹事代表（諸江）の経過報告と、恒例の消息返信ハガキにもとづく全会員の動静の報告があったが、総員一一三名中病欠十三名、内入院加療中の者七名あり、（内山、米田、小野、府中、嶋村、北村、小林）。尚本年は太田耕作先生、小野竹三郎先生の御両名と会員田口利一、楠邦雄の両君が亡くなられ、一同御冥福を祈り目禱をささげた。引続き九十周年記念事業募金の収支報告があり十桜会として¥二五〇、〇〇〇を寄付し承認をえた。

九十周年に符節を合せて落成された五階建の素晴しい近代校舎は、同期の辰村組社長・中側尚英君の請負になり、又初代富田校長の胸像復現は同じく同期の二紀会重鎮堀義雄君の創作になるのも十桜会として誇らしく特筆すべきことだ。

懇親宴では、益々お元気な宮沢、塚野両先生よりお言葉をいただき関東幹事代表古沢君の乾盃の音頭で開宴、柿木君の好意による金沢芸妓五名のサービスで会も一段ともり上った。

翌十五日は朝食後、恒例の各地区報告があり（関東—古沢、関西—福塚、中部—沖野、北陸—諸江）又、西村君、八日市屋君、中側君の楽しい体験スピーチを聞き、最後に来年の総会は東京都内で開催し、日時その他は関東幹事に一任して午前九時三〇分閉会した。閉会後、二十数名はマイクロバスに便乗して泉丘高校に向い新校舎を見学し記念式典に参加した。

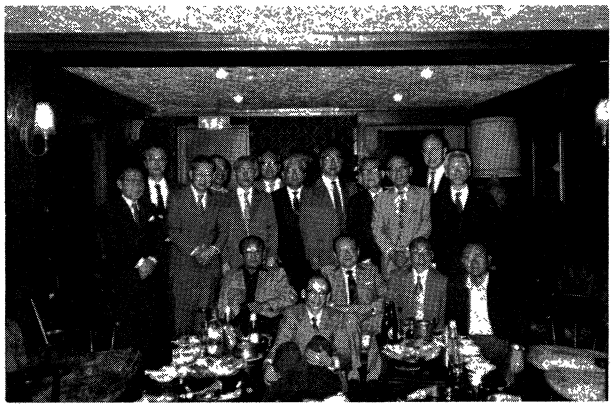
以 上

（諸江敏夫記）

◇在京46期生 45周年の集い開く

五月十日㈭午後六時より日比谷のクラブ霞灯(かすみとう)で金沢一中46期（昭和十四年卒）在京有志が二年ぶりに集まった。中曾根首相に先がけてパキスタンから帰朝早々の多忙の時間をさいてかけつけた飛島建設の吉田喜市副社長や、世界を股にかけて飛び廻るかたわら、副社長に就任早々会社を見事再建の軌道にのせたタクマの細川君、新日本証券から太陽投信委託の社長になり、現在トップを譲っても今なお実力者としての睨みをきかす尾本堅太郎君等を始めとして大西、森、長沢、西田(勝)、坂木、山田(国)、畑中、菅野、村上、得田、松寺、下村、村井、杉田、山本の計十八名、話に花が咲き尽きることがなかった。

懇親会に先だって、世界に冠たる技術の日立の、しかも時の花形高度情報通信システム事業部に現役で活躍中の山本君から、特にお願いしていわゆるINSとかVANということについて一時間ばかり話しをしてもらったが、十七名の小人数には全く惜しい内容だった。



杉田君が、竹内先生が是非出席される様最後まで努力と配慮を続けてくれたのだが、八十をすぎる御高齢のため、当日になって大事をとって不参となったのは残念ながら止むを得なかった。

一応九時散会となったが、今年は我々の四十五周年、これだけの人たちだけでも集れたのは有意義だったと思う。私としては科学万博や日比

谷の土地開発プロジェクトがあり、己れの仕事と健康のバランス等を考えて、これからは同期会の実際の世話人は杉田君と山本君にお願いすることとしたが、我々のささやかな同窓の集いも年と共に数が減って行くのは淋しいことである。年をとればそれ相応に心身の安定と健康が先ず第一。昔から心の通い合った者同士お互の身の処し方養生訓をもちより励まし合って、今まさに激動の世界の中で大変貌を遂げつつある東京の一隅で、ひとときぐらいは皆で静かに加賀四百年の歴史と文学、伝統文化に培われたふるさとを語り、金沢の抒情となつかしい想い出をくみ合い、いつまでも強く生きて行きたいものだとしみじみ思った。

（46期東京支部　村井又兵衛記）

◇一中47期同窓会

四七期の同窓会は昨年十月十四日、母校創立九十周年大会の前日、金沢国際ホテルにて開催された。

これは同期の坂本労働大臣を励ます意図も含まれているため、金沢在住者は勿論、関東、関西、遠く仙台から総勢三十九名が参集した。

坂本労相は、SPや秘書と定刻より三十分も前に到着、定刻六時、大蔵幹事が司会となり、東京の中野幹事が挨拶、大阪の木村幹事が音頭をとり金沢一中創立九十周年と坂本労相の就任を祝し声高らかに乾盃した。

続いて坂本労相の挨拶と同期生が順番に自己の近況の報告を行う。又元県議の島村隆君から、次の国政選挙の二区は三人から二人になるかもしれないので同期生は絶対に坂本を落さぬよう頑張ろうと激励の挨拶をした。

次の大会は十月中旬箱根で開催することに決定したが、今まで苦労をかけた女房族と同伴で出席することになり全員一致で決った。

最後に一中校歌を声高らかに全員で合唱して散会した。

（大蔵吉夫記）

近江町音頭

作詞　野本正作（泉六回卒）

一、お天道様は寝ておいでても
近江町市場は起とるわいね
今日も一日まかせておきな
百万石の台所
ひだるい思いは
こりゃ　させはせぬ

二、ねじり鉢巻ゴム長合羽
口は悪いけど並べたもんは
何処へ出しても恥かしないわ
百万石の品自慢
切った啖呵に
こりゃ　花が咲く

◇関西本多会ひらく

関西在住の金沢一中の四十・四十一期第三回合同本多会を、十二月十日夜、大阪市笠屋町のレストラン、「乃呂」で開催することを呼びかけましたが、師走の折何かと多忙のこともあり、又、折角出席を予定のところ急に体調を悪くし欠席するなどで、結局左記七名の出席で些か淋しい会合となった。氷の上に貝殻のまま盛りつけた、広島の名産「生かき」を味わい乍ら、昔話などに花を咲かせ愉快に楽しく過ごし、次回会うことを約し散会した。（小泉茂吉記）

（出席者）小林良夫、能木場俊吉、坂伊之助、千田民夫、谷村弘、三浦繁雄、小泉茂吉

◇野々市一泉同窓会を設立

野々市一泉同窓会は九月二十二日、金沢国際ホテルで設立総会を開き、約百人の旧制一中、金沢泉丘高卒業生が結成を祝い合った。

同窓会は同校の創立九十周年を機にOBらの間で機運が盛り上がり実現。野々市町に在住、勤務する同窓生三百六十五人で構成された。会には鍋岡利明同校長や林繁夫松任一泉会会長らも出席、会長に山下貞雄氏（一中五六期）を選んだ。

来月十五日に行われる九十周年記念式典には、同高校舎内で会員がソメイヨシノの苗木二十五本を記念植樹することを決め、山下会長から鍋岡校長に目録が贈られた。

90周年記念の植樹

◇51期一桜会大会

戦運も傾きかけた昭和十九年二月二十二日が卒業式でした。入校のとき二百十三名いた同級生も、卒業の日は陸士、海兵組が繰り上げ入校したこともあって、百五十名はいたでしょうか。寒々とした曇り空で、今にして思うと国の前途を暗示するかのような、心なしか寂しい卒業式でした。それから四十年、すでに二十五名の友を失ったものの、百八十八名（うち消息不明九名）が、戦後の風雪の歳月を生き抜いて今日に至りました。

おだやかな初冬の一日、昭和五十九年十一月十七日、四分の一にあたる四十三名の同級生が、級友坂田宏君が経営する粟津温泉坂田屋につどい、四十年の思いをこめた記念の同窓会を盛大に開催しました。

宮沢外与治、奈良正一、桑原定平、東正雄の四人の恩師をご招待しましたが、宮沢先生は感冒のため欠席の連絡が前日にあり、又この日を楽しみにしておられた浦田和先生が十月下旬に急逝され、海軍体操でしごかれた思い出話を語ることができず残念でした。

浦田先生をはじめ物故者の冥福を祈る黙禱のあと、同窓会長宮太郎君があいさつ、世話役の佐野豊君から同級生の近況報告があり、三人の先生を代表しての桑原先生のご祝辞は、喜寿を迎えられたとは思えない若々しいお声に、四十数年前の幾何の授業をふと思い出しました。そして東京から駆けつけた越田保君の音頭で乾杯、宴の幕は切って落とされました。

関東、関西、中京など県外からも十三名が参加しただけに、卒業以来の初対面という人も多く、初めの二、三十分間は出席者名簿を手に「あいつはだれかな？」が話題の中心。五十八年の同窓会名簿で不詳組だった中井泰一郎君、水落出君も元気な姿を見せ、皆に取り囲まれていました。コの字形の席もいつしかくずれてしまい、グループごとにはずむのは紅顔のころの昔話。みな五十七、八歳ながら、頭髪の移り変わりにおたがい十歳以上の年のへだたりすら感じられ、人それぞれの人生模様をしのび、うたたの感慨を覚えました。

宴もたけなわ、一中時代、金石の学生相撲の砂浜で歌った応援歌の数々を大声で歌い、最後に五年当時、応援団長だった藤沢正清君の三々拍子の手締めで大広間の一次会を終了、続いて新装なった坂田屋ご自慢のホールでフィリッピンの美女の華麗なショウに気分を若返らせ、各部屋に興奮の余韻を持ち込んで深更まで旧交を温める語り合いが続きました。

翌日は、有志三十余名がマイクロバスで金沢に移動、新築の泉丘高校の校舎を見学、昼すぎ、再会を約束して解散しました。

（井沢記）

〈参加者〉

池田文雄、井沢郁朗（横浜）、石黒義男、石田豊、今枝茂夫、岩木昭一、葛西義隆（枚方）、河合栄一郎、川原善一、木田威俊、小松弘伯、酒井忠之（箕面）、佐野豊、松本実（旧姓篠田・富山）、高桑保治、高光希久夫、竹田徳太郎、多美谷達男、辻成人（旧姓谷）、土田満敏、中井泰一郎（東京）、中野利男、西村康賢、新田勉、平松工人（横須賀）、藤沢正清（福井）、朴木春夫（東京）、松田良三、松本守、三浦秀行、水落出（神戸）、宮太郎、宮野良雄（豊中）、宮林和彦、園部哲三（旧姓村田）、本野文雄、坂田宏（旧姓湯沢）、横井衛、吉岡清、中川忠雄、森聖揚（横浜）、西能史郎、越田保（東京）

一泉俳句

能登線

馬場　宏（通信二七回卒）

蕗の苔　車窓に崖の
せまりたる

駅毎に　海水浴場
能登の夏

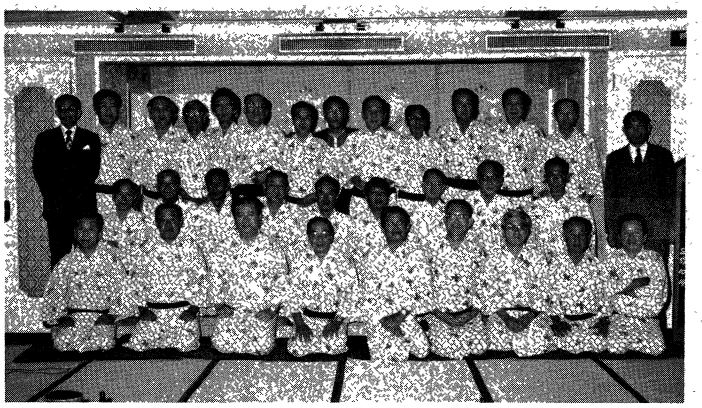
芒穂に　見えては隠る
能登の汽車

行くも一人　送るも一人
寒い駅

◇金沢一中55回同窓会

母校創立九十周年記念事業にちなんで、去る十月十四日、同期同窓会を開催しました。

関東、関西からも馳参じ総勢三十二名が、午後六時半から、山代温泉ゆのくに白雲閣で懐古談に花を咲かせ、盛大に懇談会が行われました。



それに先立ち、十二時半からは心配された雨も晴れあがった加賀芙蓉カントリークラブでゴルフコンペを行い、十二名の参加者で腕を競いあったが、小西昭君が、49・47グロス96（ハンディ＝ダブルペリア方式）で優勝を獲得しました。二位吉田武義君、三位は経田政人君でした。

翌十五日の母校記念式典並びに祝賀会には、関東代表の石橋君、関西代表の片瀬君を始め地元会員も含め十四名が参列しました。

（金井一郎記）

◇一高卒業三十五周年大会

一高出身者にて結成の同窓会は本年三十五周年を迎えることになり、この全国大会を去る八月十一日に金沢市の大八にて開催した。

遠く関東、関西よりの諸兄に加えて当時の先生である任田先生をお招きし旧交を深めた。

出席者は二十二名となったが夫々元気一杯の顔でお互いの健康を喜び合った。

年齢も略、五十歳を数え、互いに各自の職場の中堅とも云える年齢となった。

幹事より、本年は母校創立九十周年に当り、当日の式典、記念事業の報告あり大挙参加を約して散会した。

（吉竹記）

当日の出席者は次の通り

石動健三、石崎定男、伊藤朝隆、川合　健、川北　篤、小村良智、小森鍈一、柴田　豊、経田政人、利岡　正、中橋寿雄、早崎鉅造、藤田栄一、棒田　清、森田喜久、山守敏雄、油谷　博、服部　弘、福岡　正、高林昭三、吉竹毎謳

（吉竹毎謳記）

◇関西八泉会ひらく

毎年通例として開催している関西八泉会も今年で第五年目を迎えた。

遠く故郷を離れて関西に住む吾々には時により金沢の地が恋しく同郷出身の集いが又とない楽しみでもある。互に連絡をとり、去る六月十日京都三条河原町のローゼンタールに於て関西八泉会の会合を催した。

一年振りに開いた同会は益々和気藹々、想い出の話に時の経つのを忘れる程、来年も亦継続せよとの声しきり。

次回は泉野の新校舎見学や墓参を兼ねての金沢にて開催と決定し再会を約して散会した。

（山本記）

一泉俳句

千枚田

高村俊子

（通信十五回卒）

枢山の　影移りゆく　刈田かな

乳牛の　乳房をぬらす　草の露

稲刈りて　岩根あらわや　千枚田

猫の尾の　波うって跳ぶ　藷の畝

潮風の　柏実をもつ　岬かな

「風」同人

同窓会通信

◇五十九年度 東海一泉会ひらく

名古屋地区には珍らしく小雨の降る九月九日(日)に昭和五十九年度東海一泉同窓会の総会が催された。

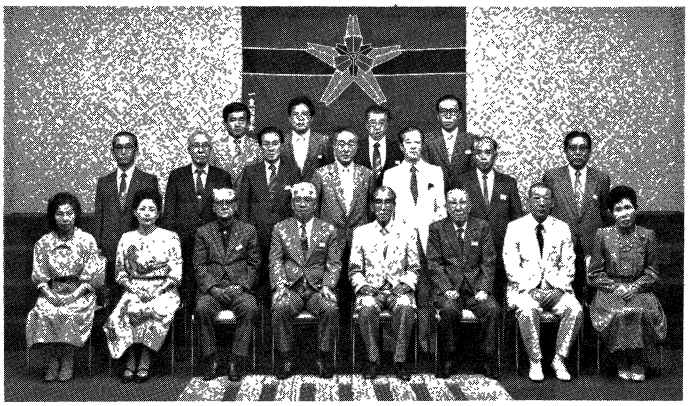
会場は弥生会館の別室にて、元会長前田秀之氏（大正九年卒）山科清栄氏（大正十三年卒）の長老以下二十名の会員が顔を揃えた。金沢の本部からは西多事務局長が遠路を出席され開会された。

湯谷会長の挨拶につづき沖野幹事より支部運営の経過報告があり会員の消息についてくわしい報告と共に欠席者の本席への便りを伝えられた。

尚、西多局長より、本年十月挙行予定の母校創立九十周年の事業内容の説明あり、この機を利用して故郷へ帰り大会に参加の希望者もあり楽しい一ときを過した。

又、この機会に東海一泉会の新名簿が発行され、会員数も一一五名の多きに達した。

次回総会には更にこの会員に呼びかけ多数の参加を希い、山科清栄氏の万歳にて散会した。



◇関東一泉会支部の総会

本年は会場を新宿駅南口のホテルサンルート東京に移して、関東一泉同窓会総会が催された。

泉丘高校よりは鍋岡校長、正村教諭、同窓会本部よりは宮会長、西多事務局長とが参加し、総勢百五十名の会員が一堂に集った。

大正十四年卒の下村節義氏等の同期生から昭和四〇年代の若き会員で会場は熱気に包まれ和気溢れる同窓会となった。

浦会長は開会の挨拶の中で、先般、金沢の母校創立九十周年記念に参加の模様をくわしく説明され、その盛会振りを報告された。

続いて鍋岡校長よりその謝辞あり、宮会長より、関東一泉会支部よりの多大の協力のあったことに対し、お礼の言葉があった。

宴会には、ステージに立って歌う者、踊る者と、老いも若きも同じ学舎に学んだ同志の気易さに和気藹々の同窓会風景となった。

九時近く、又の会合を約し、別れを惜しみ乍らの散会となった。

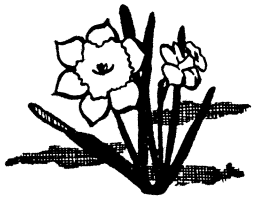
坂本労相と一泉剣友会総会

泉丘高校剣道部と母校出身の同OB会で結成されている一泉剣友会の総会が、本年度は坂本労働大臣を迎えて去る十月十四日母校体育館道場で開催された。

総会には旧金沢一中剣道部OBや泉丘男子剣道部員、女子剣道部員を含めて総勢約八十名が出席した。

総会では最近の一泉剣友会、同校剣道部の活動状況が報告されたあと一泉剣友会の役員改選が行われ、新会長に高辻秀時氏（旧一中四三回卒）が選ばれた。

総会終了後、坂本労相（旧一中四七回卒）は東京より持参の剣道着に身を包み、OB会員、同泉丘剣道部員四十名と稽古、剣道七段の同労相を交えて約三十分間汗を流し、竹刀の感触を楽しんだ。



泉丘通信制
第二回文化祭盛況

多勢のみなさんの、参加やご協力により、第2回文化祭を、無事に終えることが出来ました。

午前の催し物の部では、集団生の合唱コンクールが行なわれました。

また、とび入りにしましても、生徒会や先生方の他にも多数の人が参加して下さって、時間が足りなくなるのではないかと心配するほどでした。

また、一般生は合唱を行ないましたが、いろいろな工夫があり、チームワークの良さを感じました。

午後からの展示、バザーの部では4年次とNHK生がカレー店、3年次がバザー、2年次と5年次は喫茶店、集団生はお茶を開きましたがどこも人でにぎわっていました。

また、上杉先生を中心にD・Jを開き、大変なにぎわいでした。

前日の準備の時に、先生は人が集まるかどうかを心配していらっしゃいましたが、当日は大成功で喜んでいらっしゃいました。

また、最初は展示のための作品の集まりが悪く心配しましたが、文化祭が近づくにつれ作品も集まり、立派な作品展示となりました。

最後に、ご協力して下さったみなさんに深くお礼申し上げます。

文化部長　一般四年次　黒崎　貴志

人数の少ないクラスや、練習時間が充分にとれなかったために苦労したクラスもあったようでしたが、それぞれ工夫をこらしており、とても良かったと思います。

坂本労働大臣
奥田郵政大臣
就任祝賀と励ます会開く

昭和五九年五月六日
於 金沢ニューグランドホテル

第二次中曽根内閣の組閣に際して入閣された旧金沢一中出身の坂本三十次労相(四七回卒)と奥田敬和郵政相(五二回卒)との大臣就任祝賀と激励の会が、一泉同窓会有志によって開催された。当日は宮太郎一泉同窓会々長を始め会員二百余名が参加した。

過去に、一度に二名の大臣の入閣をみたのはこれがはじめてで、会場は万才の一色に包まれ盛会におわった。

一泉バレーボール同窓会結成
成功裡に終了

去る十月十三日(土)、創立九十周年記念を機に、本校体育館と金沢ニューグランドホテルに遠くは東京・大阪・新潟と全国より百数十名が馳せ参じ、交換会・親睦会が開催され、名簿と回顧録が発刊された。

午後一時より本校体育館で現役が二水高校と練習試合をし、バレーボールを記念に贈呈した。その後、九人制と六人制に分かれ、九人制はタッチあり、クイックタッチあり、フエント・レバンドありのオールドバレーを楽しんだ。二セット終了後、終了を予定したが、ぜひもう一セットやりたいと時間を延長し、参加者全員良い汗を流した。

夜の親睦会は、校歌・応援歌・思い出話、恩師のスピーチ等盛り沢山で、招待者全員のスピーチを受けられない程あっと云う間に時間が過ぎ実に盛大であった。特に創部昭和六年当時コーチされた岩井隆盛・沢枝栄七両先生の心あたたまるスピーチがあり、沢枝先生は中側尚英(42回)先輩の回顧録によりコーチされたことがわかり、名古屋での会合を早々に本大会に馳せ参ぜられ感激しました。十数名の恩師の御参加をいただき、どなたもお元気で、話に花が咲きました。

最後に、東京より参加の藤田正辰(43回)先輩が現役の奮起をうながし、最高潮に達し、数年後の再会が事務局の西坂弥三郎(50回)により提案され終了した。

創部当時の諸先輩が七十数歳に達した現在、皆々様が御健在であった故、創部の苦労や楽しい状況を知ることができ、内容の充実したものでした。奇しくも浦田和(俗称直角)先生は、大会一週間後の十九日に他界されたことを思うと、千載一遇、実に良い時機に開催されたものだと感慨深いものがあります。

最後に、盛大裏に終了したことを皆々様に感謝すると共に、心から楽しかったことを報告いたします。

泉五回卒　手下利周
(旧朝倉)

学校新聞
「桜章時報・いずみの原」縮刷版の発売について

今般、母校創立九十周年記念事業の一環として昭和十二年より昭和十七年にかけての旧金沢一中時代の学校新聞「桜章時報」の全号と昭和二十三年の旧金沢一高時代から現在に至る「いずみの原」全号の縮刷版が刊行されました。卒業された皆様には青春時代の往時の思い出として興味ある記録かと存じます。

同誌をご希望の方は、金二、五〇〇円(送料共)ご送附の上当事務局宛お申込み下さい。

◎ 縮刷版　レザック表紙
　A4版五八〇ページ

〒921　金沢市泉野出町三―十―一
　一泉同窓会
　郵便振替
　金沢〇―四二五四
　Tel〇七六二(42)〇二一一

あとがき

皆様のご協力により母校の創立九十周年記念大会の諸行事が成功裡に終了し、感謝の気持と共にホッと一息ついた今日の心境です。

皆様から寄せられた原稿をもとに編集した一泉も今回を以て第十号となりました。その内容を検討すると表題の「一泉」と稍〻異なり「一」の色が濃く「泉」の色が弱いのに気付く方も多いことと思います。編者も毎号の発刊ごとに、これが気がかりとなり編集に苦慮している次第です。これは編者が一中出身の老輩のための因かとも考えられますが、一面、泉丘出身の方々への原稿依頼の呼びかけには一向に反応のないのも一因であります。

「一泉」は皆様同窓会の機関誌であり、各期の動勢発表は勿論、意見の交換の場であります。

泉丘出身の各期の方々からの連絡を切望して止みません。

(西多外喜次記)